
Minority Spirits ~ 失われたアイデア ~ (前)

松浦 慶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Minority Spirits ～失われたアイデア～（前）

【Nコード】

N0033Q

【作者名】

松浦 慶

【あらすじ】

西暦2215年、混沌^{カオス}元年。第三次世界大戦から約1世紀の時が流れ、人類はさらなるグローバルな科学の技術革新の恩恵を受けてこれまでに無い程に繁栄した。しかし、その一方で大戦後に国が3つに分離した日本は近年、各国民の思想―（主に政治・哲学・心理学・宗教の面において）の齟齬からなる摩擦によって冷戦状態が続いており、その激しさが次第に増している。

それに加えて東京湾に新たに設けられた巨大な埋立地―（通称：咲島）

に置かれた日本国一（狭義で本州の東北の一部以外すべて）政府直属にしてグローバル科学技術のパイオニアである咲島科学技術研究所でやっかいな代物が開発されてしまった。それを巡って各国の秘密組織が暗躍し、主人公彼方や稔等を含み、たくさんの人々が事件に巻き込まれてゆく……。さらに、その科学技術の極地が皮肉にも生み出してしまった混沌一（カオス：実在界が全て繋がる。つまり、この世とあの世が渾然一体となるというありえない現象のこと）の結果、人々が直面する混乱の度は遂に人類史上最大級のものとなった。

ブローグ

風呂上がりの夜十一時、誰もいない部屋でテレビのスイッチを入れる。しかし、特に見たい番組がある訳ではない。秒針の刻む音だけが支配する部屋が何となく落ち着かないというのはおかしい文明病だと自嘲気味に思いながら、長方形のディスプレイに目を向ける。浮かび上がってきたのは深夜特有の猥雑で吐き気がするようないかにもといった感じのバラエティー調の番組だった。そのようなジャンルの番組が必ずしも嫌いという訳ではないのだが、たまたまその番組の内容が気に入らなかったというだけである。

稔はすぐさまリモコンでチャンネルを変えた。今度は見るからに真面目そうなニュースだった。

「昨夜午前零時三十分未明、日本と朝鮮資民主義国の国境にあたるかんもん関門鉄道・旧国道トンネル（以下合わせて関門トンネルと称します。）が爆破されるという大規模なテロ事件が起きました。」

誰が聴いても物騒だと思うニュースを、黒いスーツを着た色白の男性アナウンサーが緊張のある面持ちでカメラに向かって伝えていた。

「事件当時は幸いにもトンネル内に列車は通っており、周辺の海にも船舶等は無かった為に死亡者及び怪我人はゼロの模様です。」

「……最近朝鮮で怪しい動きがあるとは噂に聞いていたが、相手国は一体何を企んでいるのだろうか？」

疑問に思いつつ、再びニュースに集中する。今度は事件の主な概要についてだった。

「尚、爆破原因や事件背景の詳細は現在調査段階とのことですが、ある専門家曰く、『最近の周辺国の一連の動きから推すに、咲島研究所の技術を狙っている』とされる博多側の新政府が非合法に關与している可能性が非常に高い。』と述べています。これがもし事実であるとすれば、我が国に対する軍事力をもった国際的脅迫行為ということになり、見逃すことは困難とされます。従って現在我が国では全国に非常事態宣言を発令し、国民全体に警戒を呼びかけ危険と想定されるエリアからの避難を促し少しでも多くの安全を確保すると共に、万全な軍事体制を整える為に、現時点で軍事同盟を組んでいる米軍と自衛隊による特別合同訓練が急務となるでしょう。」

「――やはり。博多の連中は一体何を考えてるんだ？これからの日本の平和はどうなる？15年前みたいな大惨事にならないといいが。バックには米軍がついてるが、博多のバックについている朝鮮のそれと比べれば聊か頼りなく、心もとなさは拭えない。だが、せいぜい脅し程度で収束することを祈ろう……。」

「今から約四半世紀前に日本の元九州にあたる領土のほぼ百パーセントは日本から朝鮮市民主義国に吸収され、政治的に独立した博多特別自治区（通称博多新政府領及び博多）として発足しました。その新政府領と我が日本国を結ぶ関門トンネルですが、周知の通り十五年前の11・23に勃発した愛媛・高松同時多発テロ以来、両国の関係が険悪化したのを契機に国道線は完全封鎖、鉄道線は臨時や貨物を省いた定期列車が廃止となりました。」

稔はそこで一度思考をストップさせた。そして、大きく深呼吸。二酸化炭素が濃くなった空気が全身から抜けた時には、ディスプレイの中の世界は変わっていた。静謐な部屋に広がる細波のハーモニートモノクロの粒子が蠢く未知なる宇宙。ずっと眺めているとなぜか心が落ち着く。今日あった全ての嫌な出来事をつい先刻のシャワー

よりもずっと綺麗に洗い流してくれる。

――自分って妙なものに癒されるもんだ。しかし、この宇宙を越えた先には一体何があるのだろうか？

無数の星の中、汚れなく、清らかな場所で、誰の目も憚ることなく、誰からも束縛を受けない。

好きな勉強をして、好きな友達と喋って……。

そんな自由の一粒があって欲しい。

絶対あるだろう。この宇宙の何処かに……。

だってこれは全てを包括した、限り無い宇宙だもの。

しかし、手の届かない処にそれはあるのだろう。

触れてはいけない。

触れた瞬間から、鉄の薄いプレートが酸化してしまうように、それは理想から現実へと姿を変えてしまう。

輝きを失ってしまう。

だから神様が親切にも遠くへ飾ったのだろう。

たとえ届かなくとも、見えなくとも、見分けがつかなくとも……。

感じることはできる。

その「物」ではないたった一粒の欠片が僕の靈魂にしっかりと埋め込まれているから。

そうやって常に夢というよりどちらかといえば妄想に近いストーリーを膨らませて、日々の不安を払拭し、合理的に消化する。長い人生は何時だって、そんなことの繰り返しだ。

勿論、今は秒針の白けた音なんてとっくにかき消されている。

プロローグ（後書き）

はじめましてー。松浦 慶です

新年あけましておめでとうございます。

遂にネット小説デビューしてしまいました！！

（今年から宜しく願います。投稿は昨夜だったのですがね・・・）

このプロローグは要は主人公の1人がTV見てる場面です。

まだ1人しか人物が登場していないというベタな始まり方ですが、これから色々なキャラが登場させていきたいと思えます。

（ちなみにもう一人の主人公の名前は「望月 彼方」と言います。いかにもといった感じですねwwww）

まだまだ拙い文章ですが、どうか温かい目で見守ってください。

これからどうぞ宜しくお願いします！！

はじまりと悪夢（前書き）

アイデア【ギリシアidea】

もと、見られたもの・姿・形の意。プラトン哲学の中心概念で、理性によってのみ認識されうる実在。感覚的世界の個物の本質・原型。また、価値判断の基準となる、永遠不変の価値。近世以降、観念、また理念の意となる。

（広辞苑第五版からの引用）

はじまりと悪夢

気がつけば目の前では見知らぬ男が不気味な薄ら笑いを浮かべながらこちらをじつと見すえている。ここが何処かなんて分からないし興味も無い。強いて分かることと言えば、深夜の暗黙に佇む古風な洋館と思しき建物の中で、黒いサングラスと青いマスクをつけ、手には指先が覗いた朱色の手袋をはめ、全身黒づくめの背広にスキンヘッドといった、外国映画に出てきそうないかにもといった感じの胡散臭さ極り無い男と木製の高級そうなテーブル越しに座り、向かい合っている、或いはいがみ合っているということぐらいだろうか。しかし、稔は不思議と恐怖を感じなかった。彼の中にある直感的な何かがレム睡眠時に発生する無意識からの幻覚にすぎないということとを告げていたのだ。

――存在しない者にむかってまともに会話をする可能性を考えるなんて愚な……。

しかし、そう思う一方で今いるこの空間は言葉で表現することは困難であるが、妙に現実味を帯びているようにも思われた。試しに自らの頬を抓ってみたが当然のように神経が痛みに反応する。だが、夢の痛みなど高が知れてると彼は自分に言い聞かせた。

「今日も寒いなあ。」

意外と平凡、というより妙に馴れなれしい第一声。無論、辺りの静寂さとなによりも男自身の印象が悪く、薄気味悪いとも言えたので返答する気にはなれなかった。男の顔をもう一度確認する。歳は三十代半ばぐらいだろうか。見る角度によっては二十代にも見えなくもない。しかしその頬は骸骨のように削げ落ちていて、蒼白さが目

立った。それでも不思議なことに、弱々しいオーラは窺えない。
稔は冷静に男を分析している自分が馬鹿らしく思えて、現実の何某^{なにがし}から逃避するかの如く、隣にあった広い応接室のような部屋へ移動したが、男はまるで無視しても無意味だと暗に仄めかしているかのように沈黙を保ったまま執念深く尾行してくる。

- - - - - よし、こうなったら物の一つでも投げつけてやろうか・
・・。

そう閃いた稔は近くにあった置時計を手に取り、男に向かって投げつけた。

直撃!!・・・の筈が、それは男の体をあつさりとすり抜け、何事も無かったかのように静かなままだった。そして、床に落ちた筈の時計が元の場所にあった。稔はしめたと思った。

「おや、もう少し分別^{ぶんべつ}のあるお方だと思っていたのだが・・・・。

」

紫色の血色の悪い唇が淡々と言葉を紡ぐ。予想外の展開に少し狼狽するが、これも自分の夢の範疇であるという認識をまだ変えなかった。

「分別も糞もあるか。直前の事実が物語ってるように、所詮は夢の出来事だろう。」

稔はどうせ自分の夢なのだから、と今度は堂々と厚かましく言葉を投げつけた。

「面白い。大した度胸だ。」

男は先程よりもさらに強く微笑んだが、サングラスの奥の表情まではわからない。

「お言葉ですが単なる皮肉にしか聞こえませんか。」

男の人を小馬鹿にしたような言い草に、とりあえず言葉をかえしておいた。

「だが、小生意気な御託も最早これまでだ。」

男は稔の言葉を遮った。稔も男の言葉を見殺しして、目の前にある吹き抜けに飛び降りるっ！！・・・だが、空中に足がついて落ちなかった。正確に言うところには床となっていた。

・・・どうなっているんだ。これは紛れもなく夢だ。しかし、夢であって夢でない。おまけに現実と区別出来ない程に鮮明すぎる。それに普通の夢ならば大抵、高い所から飛び降りれば覚醒する筈だが・・・。

稔は少し焦りを感じ始めた。攻撃しても回避してもどうしようもない。早くこの奇妙というか不気味な空間から抜け出したいのだが、その為にまず何をすればいいのか皆自分からなかった。というより選択支は既に手元に無かった。

「それもその筈、ここは私の想念によって構成された意識世界。つまり君は私の中の別人格に過ぎないという訳だ。」

稔はますます訳が分からない。他人の意識に侵入しようとした覚えは無い。咲島技研で妙な代物が開発されていて、それは人の夢に侵入出来るとかなんとか胡散臭い話を小耳に挟んだことはあるが、現

実的な話とも思えない。

「人の意識に侵入してくるなどなかなか精神破壊者としての素質があるようだ。覚醒レベルも正常値より少し上のようなのだ。」

「ちょ、待てよ。おれはあんたの意識に侵入しようとした覚えは無いんだけど。」

稔の尤もな意見を無視して、人間のものとは思えない無機質な声がまくし立てる。

「余分な人格は主人格たるこの私に駆逐されて然るべきであろう。おまえが何と言おうが言うまいが、全て私には無関係だ。なぜならば、私の意識に闖入してきたおまえが異物でないとすれば何だというのだ？という問いかけに対する答えが示す通りだ。」

男はそこで言葉を区切り、背筋が氷りつくような含みのある薄笑いをした。しかし、またすぐに元の無機質な真顔に戻った。そして、次に突き出してきた言葉とは……。

「かく言う訳で、若人の魂よ、いざここで滅べ……。」

男の右手には青白い燐光。空中には既に四つの星が出来上がっていた。

「おい、待てよ。あまりにも唐突だろう。しかも公平じゃない。おれとある取引をしよう。それで利害が一致する筈だ。」

……信じ難いことではあるが、仮に咲島技研の代物が関係しているのが本当だとすれば最近、巷で噂になっている例の組織を狙

。 った刺客である可能性が高い。ならば、これしか方法はない……。

レーザー光のような鋭い光が次第に薄れてゆく。そして、再び見えた男の顔は眉根を寄せていた。

「取引とやらの内容とは一体何だ？」

稔はその内容を密かに告げた。すると、男は先刻よりさらに不敵に微笑んで言った。

「それは実に面白い。カイン・シュディール様もきつとお喜びになるだろう。了解した。」

稔はそこで一先ず一命を留り止めることができた。無論、男の漂泊されたようなその不気味な相貌には溢れんばかりの好奇と狂気の色が淀んだ空気の如く漂っていた。

稔がややホツとしたのも束の間、男は猶も釘をさしてきた。

「だが、条件付きで、だ。先程も述べた通り、おまえの有している特殊な資質は我々にとって武器にも脅威になりかねる。故に、おまえの気持ちが変わってしまう前に烙印を捺しておこう。」

「烙印って何だよ？ 随分と幼稚な感がする代物だけ……。」

男は稔の質問が言い終わらないうちに、彼が持つ顔と同じく純白でどこか女のそれを思わせるように妙に艶めかしく、とても華奢な手の指の先を器用に操って空中に大きな円弧を描いた。すると直後、その指でなぞった部分がまるでカッターナイフで紙を切り取ったような感じで奇麗に空間に亀裂が入り、抜け落ちた。そして、只でさえ暗い部屋にさらに一トーン濃い闇の空間が生まれた。最早それは

空間と呼べるのかどうかもわからない。でもそんなことはこの際、
瑣末なこと以外の何でもなかった。寧ろ考えている暇などと与えられ
ていないのだ。稔は目の前で高速に展開される夢なのか現なのかも
定かではない現状を捉えることで精一杯だった。漆黒のさらに上を
行く闇の口は次第に嵩と濃さと邪悪な不吉さのオーラを増し、中か
らは部屋の薄闇に照らされた人型の輪郭が見えるようになった。そ
して、輪郭を持ったその何者かは闇の口からまず足を伸ばして、便
宜的に地と呼ぶべき地にととうと足を付けた。腕や胴体と思しき箇
所が出終わった後もその邪悪な闇は例の何者かの背後に何かしらの
ジंकスを連想させる象徴的な尾をひいて、その残像を漠然と周囲
に漂わせていた。

そして、顕わになった者の正体とは……。

「やあ、御無沙汰だねえ。相変わらずの放浪者かい。」

彼には見覚えがあつた。しかし、名前が想起できない。確か旧友と
いう間柄だった筈だが、何というのだっただろうか？喉元まで出掛
つたというのに、その記憶は瞬時にして忘却の彼方へと引き戻され
てしまった。それはまるで自分が無意識にその名前を思い出すこと
を拒絶しているようであつた。いや、それはもしかしたら事実なの
かもしれない。

……何故だ？先刻^{さき}から何なんだ一体。全てを説明されないま
ま、一方的に言葉や状況をつきつけられて、相手の意図を推測する
暇も道理も公平さも何もあつたもんじゃない……。

「どうやら君は僕の名前を本気で忘れてしまったようだね。全く、
人の精神というのは実に都合良く出来ている。そして君はあまりに
も薄情だ。」

目の前に顕わになった彼も男同様、口元が引き攣ったどこか歪んだ嗤^{わら}いを顔に滲ませていた。癪に障るというよりも、どこか畏怖を覚える嗤い方だった。背筋に悪寒が走る。

「待て。おれは確かに君の名前を忘れた。正確に言うならば思い出せずにいる。だが君の存在は確かにおれが経験したものだ。」

稔は意表を突かれた言葉に狼狽しながらも表面には出さず、そう言った。

「ふむ、なるほど。経験ねえ。その表現は陳腐だな。でも、別にいいんだよね。名前なんてのはこの世界においては大した意味を持たない。時間という概念もここには存在しない。仮にあるとしても、どこか異邦の地から舞い込んできた流行らないお伽話を余程の物好きが弄んでいる代物でしかない。」

「余談はいい。それより、はやくこの訳のわからない茶番の趣旨を知りたいんだがな。さもなくば君の……」

先程から散々焦らされていた稔はついに理性の箍が外れかかって思わず相手の胸倉を掴もうとしてしまった。しかし、一瞬の筈のその動作は相手の手首の一捻りによって、それこそ一瞬にして封じられてしまった。稔の背筋には闇を帯びた冷気がさらに激しく通過した。

「まったくそういう愚かで単細胞なところも相変わらずだね。忘れたのかい？ここは君の意思が司ることのできる場所ではないんだよ？」

相手は稔を挑発しているというよりも、自分が有利な立場にすることを誇示して余裕を表現しているようであった。稔には最早紡ぐべき言葉が存在しない。

――抵抗できないのだったら何をしても無意味だ。それに所詮、どんなにおかしくてもきつといつかは覚める夢なんだろう。あとはなるがままに身を委ねる、それしかない……。

稔は相手に諦観したように見せかけて、そんな一種の迷信めいたものを頼りにしていた。それは論理的には程遠いが、現実味をかけたこの状況下で自分を納得させるには充分だった。しかし、危機感が多少ゆるんだ自分に危惧したのもまた事実である。

「さて、君も黙ったことだし、与太話もそろそろおしまいでしょう。そうだよ、君にはあるとっておきのショーを味わって、いや、経験してもらいたいのだ……。」

ふと気づくと、彼の右手には稔の家にあるのと同じ機種の特レベリモコンが握られていた。確か応接室だった筈の周囲はいつの間にか立方体の狭い部屋となっていて、しかもそれが奇妙なことに、壁や床から天井に至るまで面という面全てが液晶画面で埋め尽くされていた。そういえば、先程の男もいない。各々のモニターには一見して何ともないモノクロームの粒。しかし、その状況から判断するまでもなく、全てが決定的におかしい。

「約束通り、君の命は保証するでしょう。否、こちらとしても只で手放す訳にはいかないもんでねえ。面倒だけど、精神的^{トラウマ}外傷を喚起させてもらうよ。それで初めて貸し借り無しという訳さ。」

「しばし待て。話に全くついていけない。おれは今記憶というのが部分的に欠落している。だからもしかしたらあなたには昔、少しばかりの借りを作ったのかもしれない。しかしだからといって、どうしてこんなことになったのかの経緯も説明してくれないで一方的に話を進めるなんて、あんまりじゃないか!!」

- - - 僕は何も知らない。何故だか勝手にとんでもないことに巻き込まれてしまったようだ。今は恐怖よりも憤りの方が感情的に勝っている。もとより両者は紙一重なのだ。

「少しばかりだつて？へえ、本当に忘れちまつたんだねえ。でもだからといってその責任はどこにも転嫁できないよ。カルマの法則って知ってるだろ？自分で撒いたカルマの種は必ず自分で刈り取らなくてはならないという、言わば因果応報って奴さ。従ってその対価を支払うのは当事者である他でもない君独りというのは言うまでも無いよね？」

- - - 待て、今何て言つた？責任？転嫁？カルマ？因果応報？罪？対価？？？俺は昔こいつに何をしたつて言うんだ？？

彼はそんな風に勤勉に御託を並べながらも、右掌の中にある小さなリモコンを握ったり緩めたり回転させたりして弄んでいた。まるで全ては自らの手の内にあるということでも暗に唆しているように・・。

刹那の沈黙。そして、しばらく経つた後で、稔はついに本物の諦観を抱くしかなかった。

- - - もうどうにでもなれ。いくら完成度の低いRPGのゲームだつてとにかく進めば何かが起こるんだ。尤もこれが仮にゲームならば不愉快すぎて洒落にならないし、世に出回るものならそれを買ってプレイした世の人々の人格は凄まじく荒廃してしまうに違いない。しかし、不思議と積極的或いは切羽詰まつたように逃げ道を模索しない、つまり、無抵抗な自分がいることにふと気づく。と、これはもしかや末期症状から顕著に見られる無意識からの好奇心？ならば甚だ場違いといふべきだろう。

そんな稔の思惑の内容を読み取ってか、まるでゲームの場面がある一定の場所を越えて、次のそれに向けてスクロールするかのようになり、久しぶりに相手の口腔が空気に振動を与え、稔に向かってある真理を表明するサインを送ってきた。

「悪足掻きしたって無駄だぞ？何はともあれ、君は僕にそういったものを言えるポジションにいないというのは既定の事実なんだよね。」

「理解に苦しむな。全くもってフェアじゃない。こんな理不尽極まりなくて趣味の悪い穴だらけのロジックは一体どういった類のジョークだい??」

稔は言葉以上に真剣だった。いくら目の前の現状が好転する兆しが無かったとしても、釈然としないことがあつては何だつて気持ちが良いものではない。

「受け答えはこの際却下する。では、始めとしよう。」

彼は稔の質問をそう遮った後、リモコンのどこかの数字ボタンを押した。すると、部屋全体をおおっている各々の画面からモノクロのモヤモヤとした黒い気体のような負のオーラが何千何万と噴出し、稔の体を放射線の如く貫通する。刹那、その心は急に安定性を失い、謂われ無き不安・焦燥・憎悪・恐怖・憤怒・その他諸々の破壊的観念によって支配された。それらのショックは体にまで影響を及ぼしたらしく、稔はその場に崩れ堕ちた。

「有名無実とはまさに今の君を寸分の狂いもなく形容した言葉だろうさ。いくら優れた資質を持っていたとしても実用化できなければその価値は廃棄処分される生ゴミとどう違う?」

床に倒れて身動きが取れない稔は顔から超至近距離にある画面の中にある映像を見た。それは、五年前のある事件。テレビのスピーカーから発せられているハウリング音がやけに近いと思ったら、それは自分の叫び声に他ならなかった。そして彼がまた容赦ない訴えを口にする。

「そうだ、やっと思い出していたただけだろうか。何を隠そう、君は五年前の今日、博多新政府の非合法な国際的暗躍を阻止する為に、当時政府直属の秘密結社「雪・月・花」の最年少にして指揮官であった僕を暗殺した。」

稔は息を飲む。そして、口からは数多なる吐瀉物が血の混じった痰と共に激しく放出された。突然体中に激痛が走る。モニターに反射して映った自分の姿は何と、頭が頂点から真つ二つに割られ、胴体からは原型を留めない内臓が飛び出し、四肢の肉は硫酸をかけられた後の如くドロドロに溶解していた。先程の彼のリモコンそうさとも呼ぶべきものによって、無意識に抑圧された忌まわしい記憶が喚起され、イメージ化し、擬似的な物理的エネルギーへと転化した負の観念が稔の幽体を攻撃し始めたのだ。

「しかし、君はそこで大きな過ちを犯してしまった。殺した僕は実は僕であって僕ではなかった。というのも、実は僕には戸籍も名前も全く同じクローンの兄弟がいて、計画とは無関係で尚且つ君の親友でもあった原型の方を殺めてしまった。」

「おれは、おれは、そんなつもりで……。」

何か言葉を返そうとするも、最早口が強張って動かない。それはちようど飾り物のように、閉口することしか用を成さなくなっていた。

「私情と結果は無関係だ。僕から原型である兄、アイデアを奪ってしまったんだからね。良心の呵責から逃れられなかった君は解離性同一性障害によって過去の記憶を忘却し、当時の君はというと、まだ未成年でそんな精神状態にあった為に情状酌量された上に、日没側の領事裁判で少年法が適用され、軽い刑で済んだ。その結果はさもありなん。僕と僕の兄にとっての故郷である博多の新政府と地元住民が大激怒した。」

「……そういうことだった……全てを思い出してしまった……最早そうなってしまった以上、どこにも逃げることは不可能だ……」

「罪無き人を殺害したのも、実質国と国との関係をこじれさせたのも、全て君の責任なのさ。そこで、だ。諸悪の根源である君への恨みも兼ねて、さらなる悪鬼として新政府側に有益に働いてもらおうと思った次第でねえ……」

長い御託を彼は一担止め、鋭利な視線が稔の顔から右手のリモコンへと移される。やがてそのリモコンはみるうちに一振りの剣となった。その時稔は全てを悟った。グチャグチャになっていた幽体は気付くと元に戻っていた。

「嘘だろ??まさかお前、日本国が世界に誇る政府直属最高秘密機関『咲島科学技術研究所』に潜入して、<夢中の隠剣>を奪ったというのか?」

烙印直後の陽性反応が解けた稔は徐々に物事を思考する余裕が生まれてきた。

「あの黒の四者と呼ばれた史上最悪の天才猟奇的殺人犯でさえも潜

入はおるか指一本触れることができなかった完全無欠のセキュリティシステムに何故……」

＜夢中の隠剣＞とは近年前述の日本政府直属の特別研究機関「咲島研究所」通称咲島技研で開発された次世代型兵器のこと。人間が誰でも持つているとされる生体エネルギーと喜怒哀楽から生成された感情をエネルギーに転化させて戦闘に利用する剣型の武器である。また、思念の強度によつては刀身にこめられた想念が他人の精神に干渉するという機能もある。元々精神病患者の治療用として開発されたTP機器を応用して作られた為、技能さえ身につければ他人の夢の中にも侵入出来る。しかし、それでは何故自分が正体不明の男の意識内に存在するのかの説明がつかない。謎はさらなる謎を呼び、闇夜の如き深淵を増すばかりであった。

「さあね。或いはこんな考えには及ばなかったのかい？首謀者は元研究員だったという可能性を。それより君に一つ忠告を差し上げよう。両国の沸騰を今すぐにでも止めたほうが良いのでは？」

稔は男の言葉に愕然とした。東アジアでも有数の経済大国に加えて、国際的に見ても治安水準が断突トップレベルの平和であった筈の日本国と自分はこの先どうなってしまうのだ？まさか、今まで住んできた自分の国は理想郷ではなかったのか？可能性としてゼロではない。だがそれはあまりにも唐突な出来事だった。しかも国際冷戦の渦中での出来事だ。おまけにその火種は自分にもあるという悪夢のような現実。そのまさに現実という悪夢の中で男は待ったなしとばかりに不敵な嗤いを隠さぬまま右手に持ったその剣の切っ先を眉間から数ミリ程の距離に突きつけ、動きを牽制してきた。

「おまえ、先刻殺さ^{さつき}ないと言ったばかりだろう。」

「まあそう早まるな。今から君を現世^{げんせ}へ送り返す。おとなしくして

いろ。」

細長い刀身が空を切る音と共に振り下ろされ、床に一つあなをうがつ。すると、彼は右手から剣の柄を放した。さらに、剣はひとりで稔の足元に円弧の軌跡を描き、現れた線からは光が溢れる。再びの激痛。先程の邪念が体内を侵しているのがわかる。苦しみ悶えるうちに意識が混沌としていった。自分の身体が床を離れ落下しているのだと気づいたのは痛みが少しひいてからだだった。重力の法則に従って異次元に浮遊していた意識は自分の眠っていた布団の中へと吸い込まれる。実感を伴わない覚醒。案の定、パジャマは冷や汗で濡れている。だがシーツはひんやりと冷たかった。まるで何かを示唆しているようで不気味ではあったが、汗をかいて熱を発している身体には皮肉にも心地よかった。時計の針はちょうど4時半を回ったところだった。

・・・・・・どういうことだ・・・・・・烙印？どのような影響が生じるというのだ・・・・・・。

稔は直前の出来事が夢なのか現なのかも判別することができず、ただ茫然とするばかりであった。

一方、つくば市の咲島研究所内某所では、稔と交渉を終えた「彼」が立っていた。

・・・・・・これで計画は一段落。手持ちの駒としておおいに振る舞ってもらおう。

彼は1人独白を漏らし、明かりの灯らない研究所の一室を後にした。月の光もおぼろげな闇に溶け込むようにして・・・・・・。

河咲市某マンションの一室。稔は戦慄が止まらなかった。この出来

事以降彼はテレビのモノクロームの粒を恐れ、直視出来なくなつてしまった。粒子を見ると自らの過去を思い出してしまう。その過去は彼の心を容赦無く追い詰める。そして、行方の知らぬ場所へと自らを誘うのであった。

はじまりと悪夢（後書き）

とある平和の夕暮れ

2010年3月、天気晴れ。地元の公立高校に無事合格し、中学を卒業したばかりの彼方は何をするでもなく、ただぼんやりと家の窓から空を眺めていた。春にふさわしい爽やかな風と、草の仄かな匂い。そして真つ青な空を背景に漂う白い雲。何に思いをはせることもなく、そこにはただただ空白の時間が流れていた。

――受験も無事終えて一段落。何もせず只のんびりする時間がこんなにも至福に思えるとは……。

去年の暮れから入試当日までの慌ただしい日々を経た彼にとって、何もしなくてもよい時間への有難さは一入^{ひとしお}だった。そんな心地よい静寂を突如揺るがすが如く、入学祝いに親から買ってもらったばかりの携帯電話のバイブレーターが鳴った。彼方は携帯のいきなり鳴り出す着信音が嫌いなので、なんでもない普段から敢えてマナーモードに設定している。サイドボタンをプッシュし、サブディスプレイを見てみると、中学で同じクラスだった親友豊郷光貴からのメールであることがわかった。彼とは小学校からの幼馴染みで、実はこれから通う高校も一緒である。早速文章に目を落とす。

「この春休み、卒業旅行と題してみんなで北海道へ行かないか。実はおれには札幌に親戚がいて、無償で泊めてくれるみたいだから宿泊代は心配無い。各自着替え等の持ち物持参。宇都宮からは青春18きっぷを使って新幹線・特急を乗り継いで行く予定。2泊3日でメンバーは今のところ候補に挙がっているのは俺を含め望月、留萌と樟葉の計4人。参加者は明日の午後までに返信すること。」

との内容であった。晴天の霹靂とはまさにこのことだ。と、彼方は

即座に思った。本文を読む前はなにやら静かな時間を邪魔されたように少しばかり惘然とした彼であったが、好きと鉄道マニアの彼にとっては良い知らせに違いなく、心が浮き立った。問題は両親が賛成してくれるかどうかである。

――北海道か。悪くない。でもまだ3月で寒くないだろうか。でも一度は訪れてみたい場所だった。高校の修学旅行はどうせ沖縄だろうし、こんな機会はめったにない。親に相談してみよう。

自室を抜け出しろうかを抜け、リビングについた彼は父の姿を見つめる。手にはコーヒークップ、視線は部屋のテレビへ注がれていた。テーブルの上には既に読み終えたと思われる今日の新聞が置かれている。父はどうやら朝からニュースをみていたらしい。

「父さん、あいつは何処？」

「先刻出掛けたばかりで家には居ないぞ。」

「父さん、ちょっとお願いがあるんだけど。」

「何だ？」

ニュースに夢中ですぐにはこちらを向いてくれないと思っていたが、案外あっさりと返事をしてくれた。

「友達から北海道への卒業旅行の誘いがあって、奴の親戚が2日間とめてくれるって言うんだよ。4人で行くんだけど……。」

父はテーブルの上に乗った新聞を怪訝な目つきで見つめていた。それは先日起きたばかりの悪質な無差別殺人事件、いわゆる通り魔事件の記事だった。ここ数年なぜかはやっている動機なき殺人。或いは動機と行動が合同な殺人。父は暫く黙ってそれをみていた。

「やっぱり駄目だよね……。」

半ば自分の中で諦めかけていたその時、父は微笑んで言った。

「良いだろう。いくら世の中が物騒だとしてもおまえはもう高校生だ。こんな楽しそうな機会はめったにない。お世話になる人に迷惑さえかけなければ行ってもいい。」

彼方はまたも不意を突かれた。こんなにあっさりことが運ぶなんて夢にも思わなかった。もとよりその知らせを聞いたのは夢のあとではあったが。思わず嬉しさが顔からにじみ出た。

「やった！！有難う父さん。絶対におみやげ買ってくるよ！！」

「朝から何の騒ぎ??」

嬉しさのあまり大きなこえを出してしまったらしく、母の耳にも聞こえたらしい。向かい側の部屋からふと顔が覗く。

「彼方が友達に誘われて4人で北海道へ旅行するらしい。友人の親戚がむこうで泊めてくれるみたいだぞ。」

高揚した気分が一気に急転直下。母の承諾も得なければとふと我に帰る。

「駄目にきまつてるでしょ。第一遠すぎるわ。別に北海道じゃなくてもいいじゃない。高校受かったからってちよつと浮かれ過ぎよ。」

つい先刻まで北海道へ行けると確信し浮かれていた自分が急に愚かに思えてきた。何かと口うるさい母が北海道旅行など快諾する筈がない。尤もこちらの方が世間一般的に言ったら常識的なのかもしれない。

ない。

「確かに距離はあるけれど彼方はもう高校生なんだぞ。青春の為に金を費やしたってたまにはいいだろうたまには。」

「青春、て、呆れるわね。あなたは考えが浅はかんですよ。もう高校生ってしかも、まだ中学を卒業したばかりよ？おまけにこの記事を読まなかったとは言わせないわ。この物騒なご時世、中学卒業したての高校生だけで行くななんて無謀危険極り無いわ。」

父と母の口論を聞いているうちにますます母の意見が尤もに聞こえてきた。父は少し世間の感覚とズレた人だと母はよく言う。しかし、それでは自分を誘った光貴までもズレていると認めることになる。彼方はそんな理屈を組み上げてだめもとで食い下がった。

「お願い。今回だけ特別だからさ。」

「駄目。駄目といったら駄目です。わかったらさっさと支度して課題やりなさい。母さんは買い物へ行ってくるから。」

そう言い残して母はリビングをさっさといった。束の間の沈黙……。

「まあ、しょうがないな。父さんが許してもこの家のお金を管理しているのは母さんな訳だし、説得しようにも聴かないだろうから諦めろ。」

この場合は諦めるのは妥当だと、ついに父さんまで結論を出した。確かに自分は家庭を切り盛りしている訳ではないし、自分で働いてお金を稼いでる訳でもない。従って文句は言えない。仕方なく断ろう。そう心に決めかけた。

「なんて言われて諦めるようだったら行かない方がいい。」
「え？」

一瞬父が何を言ったのかわからなかった。その言葉を理解したのは10秒たってからだった。

「そんな生半可な気持ちしか抱けないようでは行かない方がいいと言っているんだ。」

父の視線はテレビでも朝刊でもなく彼方の目を真っ直ぐ射貫いていた。そんな真剣な眼差しを受けて彼方は思わず顔が強張る。

「怖いんだろう。」

「何が？」

「自分の意志や行動選択に責任を持つことが、だ。」

「……そうかもしれない。いや、凶星だ。僕は今まで自分のしたいことを我慢してきた。でもそれは果たして賢明な処置と言えるだろうか。」

「お前はいつもそうだ。自分で自主的に何かをやるうとしない。誘われたら応じる、駄目と言われたらすぐ諦める。高校受験だってそうだ。自分には合わないと思った塾に母さんの言いなりになって無理やり通い、担任からこの学校は難しいと言われればワンランクもツーランクも目標を下げて、現状に甘んじている。別にお前がそれで納得しているならいい。でも父さんにはそうは見えない。今まで黙っていたがそろそろ自我の芽生えがあっても良いだろう。」

父の数多なる言葉の槍に返す言葉を失う。

「欲しいこともやりたいこともNOと言われれば全て我慢する。いや、我慢と偽って実は楽をしてるんだ。人の言う通りにしていればたとえ失敗してもその後に責められないからな。」

父の刺々しい言葉に思わず目を背けなくなる。しかしそうしたところで父の声は依然として容赦無く耳に届く。

「でもな、他人のおりの中で易々と飼い慣らされるのもそろそろ止めにしろ。問題は当のおまえ自身がどうしたいかだ。今一度言ってみろ。」

暫くの間を置いてからだった。彼方は意を決してその言葉を口にした。

「確かに父さんの言い分もわかる。でも正直今の言葉で行く気が失せたね。他人の言いなりになって楽をするのはある意味で処世術だと自分では思ってる。僕だけじゃないんだ。今の世の中誰だってそうやって生きている。時代錯誤だよ。当たり前のことを咎められ、こんな後味の悪い思いをしてまで僕は北海道へ行きたいとは思わな・・・」

刹那、視界が反転。鞭のようなパシッという鋭い音がした。左の頬からピリピリとした痛みが走り抜ける。

「お前みないな連中が沢山いるから何時になっても変わらないんだぞ！！」

「だって父さんがどうしたいか言ってみろって言っから・・・。」

父は無言でリビングを去っていった。平手打ちされた左の頬が思い出したようにズキズキ痛む。

――自分は行きたいのか行きたくないのか……。そもそも自分は何をしたい。何を作り、どう生きたい。全くわからない……。何もしたくない。行っただってどうせ楽しくない。

気持ちがどんどん傾いていった。

――何故楽をしてはいけないのか。どうして打たれなきゃならなかったのか。今の僕には到底わからない。

気がつけばもう午後の4時を過ぎていた。そろそろ彼に返信をしなければならぬ。壁掛け時計の秒針が刻一刻と時を刻む。優柔不断な性は時間と比例して治らない。テレビは誰も見ていないのに相変わらず付けっ放し。おまけに某プロダクション所属の若手俳優が自殺、とあるアパートに住む家族が児童虐待のうえ殺人未遂で逮捕、新卒の就職率が過去最悪、世界経済の状況が芳しくなく、円高もずつつづいている等、只でさえ暗澹とした気分を余計に煽るようなニュースがこの1人だけにとっては広い部屋に向かって空しく報じられていた。彼らはこんな悲惨なニュースを流したくてアナウンサーやキャスター、マスコミの仕事をこなしているのだろうか。いや、違うな。では何だろう？ 疑問の答えは終ぞ出なかった。ふと末法思想という言葉思い出してしまう。何もかもがナンセンスに思えた。だったらこんな中途半端じゃなく、よりナンセンスな世界へと僕を誘っておくれ……。と、特に意味も無く御伽めいたことを思いながら何気なくチャンネルを回す。白と黒の粒子。程なくして欠番のチャンネルがさざ波の音を奏でる。しかしその音は近づくでもない、遠ざかるでもない。画面は動かざる死の世界。御伽などとは無縁な何も無い世界。彼方はその死を無目的に凝視した。

「そんなに僕をマジマジと見つめないでくれよ」

画面は呟いた。しかし、彼方は気付かない。心を閉ざしていた。

「君の無意識にはイキタイと反応があるよ。」

彼方は聞こえない。腕が携帯に向かって伸びる。

「当たり前だ。誰が死にたいと思うか。」

ハッ、と我に返る。今自分は何と言った？

腕が携帯に向かってまた伸びる。指が勝手に動いている。昔のことを思い出した。クラシックピアノを習っていた頃。曲を覚えれば指が楽譜に従って動く。心地よい旋律に左手の副旋律がリズムに乗って加わる。記憶だけを頼りに鍵盤の上で両手の指を踊らせる。

しかし、今は何を頼りに……。メロディーは既に無い。記憶？何の？自分の意思？？どちらも違う。では一体何がこの指を動かしている？急に眠気が襲ってきた。だが文字は構わず紡がれる。寂寥を帯びたボタンの音、音、音。

「おれは行かない。他のメンバーはどうなの？」

送信。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「……ッ！？留萌！！何時から居た？てかおれは別にお前の兄ちゃんじゃない！！」

「さつきからいたよ。たった独りリビングで何にも映ってないテレビに向かって何かボソボソと呟いてるからさ、心配になって。いいじゃん別に。しかも、こんな可愛い女の子にお兄ちゃんと呼ばれてそんなこと言うなんて贅沢よ！！」

留萌は笑顔でそう言った。急にきまりが悪くなる。

「あ、あの、あれはね、部活で演劇をやることになって、その練習。」

「ふうん。」

訝しむ目つきは相変わらずだったが、なんとかその場は回避出来たようだ。というよりも寧ろ、おまえの兄ちゃんじゃないと言われたことに不満でもあるようだった。

「つか、聞きたかったんだがお前はと思う？」

「どう思っつて何が？」

「北海道」

「ああ、あれね。あれは……」

光貴からの最初のメールに、留萌もメンバーに入っていた。だから念のため尋ねてみる。

「あ、携帯鳴ってるよ。」

「おう、来た来た。」

光貴からの返信だろう。案の定そうだった。文章に目を落とす。

「それは残念だ。留萌からはOKが出た。けれど樟葉からはまだ返信が来てないな。他の奴を誘ってみるわ。ではではノシ」

「お、おまえ、行くのかよ！！母さんに反対された筈だろ？」

「え、反対ってどういうこと??」

辻褄がまるであっていない。彼方は母が反対した時点で留萌もアウトだと、てつきりそう思っていて、それを前提に話をしようとしていたのだ。

「私が実の娘じゃないからよ。」

「………。違う。そんな筈はないだろ。」

「おれは普段の素行があまり良くないから許可してくれなかったんだよ、多分。」

「違う。はつきり聞いたんだもん。あの子はわたしの子供じゃないからって。」

「は？」

「……意味がわからない。からかっている様子もない。どうやら本気らしい。」

留萌は嗚咽を漏らした。今にもその目から涙が零れ落ちそうだったのだ。彼方は手近にあったティッシュボックスから紙を何枚かとった。しかし西川はそれを断った。

「確かにお兄ちゃんはずいぶん普通からだらしない。けどね、私が帰ってそのことを親に話した直後、お義母^{かあ}さんは良いとも悪いとも言わなかった。でも暫く経ってから、お義母さんがお父さんにこっさり相談してたのがたまたま聞こえた。『あの娘^こはわたしの子じゃないから別に何処へ行っても気にならない。いつそのこと向こうに新しい里親としてひきとってもらおうか。』って。あんたその時昼寝してたんだもの、わかる筈がないよ。」

「父さんは？」

「聞いて頷いてるだけの様子だった。隣の部屋から会話が聞こえて

きたから何かと思えば・・・・・・」

どうやらそれが限界だったようだ。とうとう彼女は泣き出してしまった。ティッシュペーパーをもう一度やろうとする。しかし強引に突きかえしてくる。

「知らないよ！この穢れた血！！こっち来んな！！！」

留萌はそそくさと自室へ引き籠ってしまった。そう言われてしまった以上、今すぐに近づくことは不可能だった。だが、彼方は心に決めた。

「やっぱおれも行くわ。OK」

送信。

普段は元気でうっとおしいとさえ思っていた留萌のことだったが、さすがに今回ばかりは気の毒に思えた。うちの親は一体何を考えているのだろうか？尤もらしい感じでつい先刻自分を叱った父はともかく、母の突然のその発言には驚いた。初めてそんなことを聞いたからだ。やっぱり嘘だろうか？でも目の前では留萌が泣いていた。何か只ならぬ予兆すら感じた。

夜7時。冷蔵庫の中にある夕食を準備する。今日母はしごとで遅くなる。父は書斎で作業でもしているのだろう。父の食事は普段もつと遅い。留萌は相変わらず部屋に引き籠ったつきりだった。念のため食事を部屋の前に置いておく。食事といっても料理が出来ない為、冷蔵庫の総菜を適当に盛りつけて温めただけのものだった。

「おい留萌、飯、前に置いとくぞ。」
「・・・・・・・・。」

返事は無かった。無理も無い。一緒に食べようかと言おうとも思ったが、暫く独りにさせておいたほうがいいと判断した。

- - - 樟葉はどうなんだろう？まだ迷っているのか、やはり親に反対されてそれでも食い下がっているのかはわからない。それにしても、留萌の話が未だ信じられない。レンジで温めたシウマイを口に入れる。たった独りでの食事。慣れている筈なのに、心なしかいつもより味が落ちてるように感じられた。

謎と計画

茨城県つくば市咲島科学技研つくば支部D棟内。研究室前のろうかには、研究所らしく無機質な風合いの白い壁のインテリアに不釣合いな程に真い絨毯じゅうたんが敷かれていた。それもその筈、そのすぐ傍らには咲島研究所職員の数多あまたなる亡骸が死屍累々と積み重ねられていた。つまり赤い絨毯というのは嘘で、その正体は屍の山を源流とした血と体液からなる大河だった。彼は只でさえ引き攣った頬と口の端をさらに歪め、独白を漏らした。

「これ程の優れた資質を持った者どもを唯ただで殺めるなど勿体ないが、止むを得ない。」

ろうかは照明が消えていて暗かった。非常口の上にかけられた案内板から漏れる黄緑色を帯びた光が酸にまみれて黒くなった血糊をグロテスクに演出する。

「天帝はついに世の咎人とがびとを裁くことを決めた。程なくしてこの現世リアルワールドにもく混沌カオスが訪れることだろう。あとは我が心と神に誓い、迅速に計画を遂行するのみ……。」

生存者が自分以外に誰も存在しない建物の中、我こそが勝ち誇ったとばかりに彼は独り哄笑うっせうを漏らした。その相貌はまさに地獄の大帝国を司る指揮官の顔であった。

しかし実は、ろうかの影には別のもう一つの陰があったことを彼は知らない。

「生体反応を示さず光化学迷彩も可能なハイテク機械人形アンドロイドを見逃すとは大した腑抜け野郎だ。」

声の主は姿こそ隠れているが、人間という生物の容姿をどこまでも模倣した無機物の塊だった。

「施設内部の機器類はその殆どが敵の襲撃時に破壊され、使い物にならない。幹部に所属する30名は先に避難するも、残りの約200名は全員死亡。おまけにまだ試作段階だったく夢中の陰剣>まで盗まれるなど、損害の大きさは図り知れない。」

しかしそれでも、無表情である筈の顔にはどこか余裕のある笑みが漂っていた。

「連中は私の体が一体いくつあると思っているのだろうか。」

言い終えた機械人形^{アンドロイド}は、その場に倒れた。次の瞬間、研究所は彼らの仕掛けた時限爆弾の発動により、激しく爆破された。無論、その機械人形^{アンドロイド}までもが建物のアスファルトや鉄骨等と共に、粉微塵と成り果てた。

「そ、そんな馬鹿な!!」

その声は先刻のそれと全く同質のものだった。しかし、響いたのは高級そうな調度品と分厚い本が何冊も並んだどこか圧迫感のある一室だった。

「指令長、先程咲島技研つくば支部のD棟も爆破されました。これから私たちはどうすれば……。」

「案ずるな長瀬。私が一体誰だと思っているのかね。事態の推移は既に網羅している。」

長瀬と呼ばれた秘書と思しき女性は、社長のそのあまりの冷静さに思わず驚愕した。

「それだけでなく夢中の陰剣>が盗まれたのですよ。」

彼女の全身は冷や汗で濡れていた。今から約3年前の夏、気の遠くなるような高倍率の中でやつとの思いで狭き登竜門を抜け、グローバルな最先端化学技術で名高い咲島社本社の職員になり、秘書官にまでいつきに昇りつめたはいいものの、ここまでこの国に危険が迫っているとは思っていなかった。しかも、その最前線に立たなければならぬというプレッシャーは尋常なものではない。

「確かに、敵は只者ではないことは否めない。つくば支部の2万4000通りものセキュリティシステムプログラムをたった独りで解析し、ハックした。唯一システムから独立した機械人形アンドロイドで狙撃を試るも、程よいタイミングで施設を爆破させ、その追隨を許さなかった。」

「彼の消息は？」

「わからない。だが生存しているのはほぼ間違い無い。<夢中の陰剣>には持ち主の周囲に特殊な安全結界を張るという効能がある。」

「システムを一元化したのがそもその発端では？」

「一元化といっても本来ならば感染した部分のデータをシャットアウトして正常なプログラムを独立させることが出来る。しかし、奴はまずそこを突いた。」

指令長の顔もどこかやつれていた。冷静であるとはいえ、今回の不測の事態にはさすがに辟易へきえきするものだ。

「敵はじきに咲島本社も狙うでしょうね。」

「ああ、我々としても最悪の事態は避けたいものだ。しかし、こち

らにはまだ切り札がある。」

「どんな切り札がお有りと？」

「そうだな、まず、本社にはまだく夢中の陰剣>についてのデータが残っている。」

「しかし、それをもとに本社でゼロから作り直すと時間がかります。他に例のプロトタイプは残っていないのですか？」

「残念ながら本部はまだ実験設備が整ったばかりだ。つくばのような試作機は無い。詳しいことは後の会議で明かす。それよりも至急仮設武装及び研究プロジェクト本部を宇都宮支部に立ち上げるよう部下に報告してくれ。」

「・・・・・・わかりました、指令長。」

・・・・・・開発と防衛を並行して行っなんて、上手いかなかったらどうするつもりなんだろう？

咲島技研本部の指令長である咲島一郎に命じられた長瀬は一抹の不安を抱きながらその部屋を後にした。

西暦2215年日本国宇都宮県宇都宮市。今から約2世紀前は総人口が約50万人の中核都市に過ぎなかったが、科学技術革新の恩恵を受けてつい5年程前には総人口100万人を越え、国から承認された政令指定都市にまで発展した。現在の日本の首都である河咲市には遠く及ばないものの、ここ1世紀の間で隣県である茨城県のかば市と肩を並べる程の全国有数の研究学園主要都市として栄えていった。そんな宇都宮で政令指定都市を目指した地域活性プロジェクトが立ち上がったから現在に至るまでの約200年間、人類はさらなる進化を時代に及ぼした。中でも化学という分野においては特に抜きんでており、石油やガソリン等の化石燃料に変わる、太陽光

エネルギーを極限まで利用し発展させ実用化した新エネルギー通称「光燃料」の普及、IPA細胞の実用化、人造人間や機会人形、AI（人工知能）、DNA解析やクローン技術、次から次へと革新的な技術がとりとめもなく生み出された。しかし、そんな化学技術が極地に達した中、人類は新たな命題にぶつかった。それは例えば人類の存在意義であつたり、バイオエシックス（生命倫理）の問題であつたりと様々である。具体的には物を作る企業等はおおむねその工程をほぼ完全に機械に依存し、鉄道等の交通機関も全てスーパーコンピューターやATO（自動列車運転システム）によって管理されるようになったこと等、最早人間が働く必要性がほとんど無くなつてしまつた為に職に就かずに毎日遊び暮らす怠惰な人間が増えてしまつたが、果たしてこのままでいいのか？ということがその筆頭である。人々の間では当然ながら意見が衝突する。今から約1世紀前日本はついに3つの国に分裂した。北から北海道、本州と四国、沖縄を継いだ日本、そして朝鮮に吸収された元日本の九州にあたる博多・・・・。

夏の日差しが容赦無く照り付ける日曜日の午後、母体となつた旧日本をほぼそのまま受け継いだ現在の日本に依然として存在するその都市で、中肉中背といった優男風の彼は超高層ビルに包囲された陽炎が立つスクランブル交差点を不機嫌な面持ちで闊歩していた。

――あああつ、・・・・。今日は久々の余暇を満喫出来た筈が、いきなり電話を掛けてきやがつて畜生。

心の中は誰も見透かすことが出来ないとばかりに、人ごみの中心の中で堂々と毒を吐くそんな自分までもが腹立たしい。彼はこのご時世需要が非常に高まつた一介の臨床心理士として毎日学校へ勤務している。人の心を臨床的に扱いケアするいわば「カウンセラー」を生業とする彼は、平日毎日県単位で異なるいくつかの指定された学校へ通うという日々を送っている。ここ最近クライアントとおりあい

が上手くいかず、どうすればいいのかの方策をたてる為に休日犠牲にして多忙な毎日がつづいていた。そして今日、やっと休日に辿り着いたと思った矢先、自宅の固定電話のベルが実際の音よりも誇張されたように喧しく寝室に鳴り響いたのであった。

「ジリリリッ、ジリリリッ……。」

「……ん？目覚まし？違うな。電話！？てか今何時だ？うーん……。」

休みの日は専ら昼まで寝ている彼は寝ぼけていて、瞼も思うように開かない。

「……ん！さ、3時！？もうそんなに寝たのか？いや、まだ暗いぞ！！」

そのことを悟った瞬間、彼の頭の中で何かがブチ切れるような鈍い音がした。

「……くおおおおおのやるるるるるるるるるるるおおおおおおおー……」
つつつつ、誰だこんな夜中に電話かけてきやがってふざけんふざけんふざ

「けんなふざけんな！！誰だ貴様！！今何時だと思ってるんだ！！3時のおやつは文明堂とか言ったらマジでガチでブツ殺す！！只でさえ忙しい俺のなけなしの睡眠時間奪い……。」

「まあまあ落ち着きたまえ津村。おれだよ、お・れ。それに僕は力ステラよりもショートケーキのほうが好きだし。それよりも君に面白い話があるんだ。ちよつと聴いておくれ。」

電話口に出やがった声の主は高校からの悪友こと成島良一である。特に大学時代、津村はよく彼と酒を酌み交わす仲であった。元々某大学病院の精神科に勤務していたが、今は市に独自の診療所を開いてる開業医である。

「貴様の面白い話など毎回高が知れてるわ！どっかの迷信教者のご講話に等しいんだよハゲ！！」

こいつは精神科医のくせに碌な奴ではないことを知っている。毎回自分が担当している患者を笑い話の種にして、しまいには「こいつの治療はおれの管轄じゃない。」とか、「日本の精神医療はもう終わった。」だとか、「薬じゃ疾患は治らない。」だとかなんとか。いったい何でこんな奴が精神科医になったのかさっぱりわからない。

「おっと、こわいこわい。これじゃクライアントもどん引きだなおい。いったい何でこんな奴が臨床心理士になったのかさっぱりわからない。」

「……………うつ、、、確かに今のおれクライアント見たら確実にドン引きだわな。」

彼の言葉が非常に癪だったが、ここで激昂するとさらに大人気ないとか揶揄されそうなのでやめておこう。

「しかも人に向かってハゲとは失礼な。僕はまだ禿てなんかいませんよ。ちなみに後輩の皮膚科医からは頭皮が綺麗ですねと褒められたんだぜ。そもそも君のように額が広くて将来ハゲ有望な左巻きに言われたくないね。」

「やはりこいつに対して慎むことは無理だ。」

「だあゝまあーね。左巻きは関係無いだろ左巻きは！それにさつさと例の話云々をつたえて電話きりやがれ！！」

傍から見れば漫才のようなやりとりが延々とつづいている。しかし夜のこの時間にかけてきたからには何か真面目な話があるのだろう。

[illegible]

「やはりこいつに真面目を期待するのが間違ってた。」

「おい、かけてきた奴が寝てどうする（呆）」

「あ、うん。」

「うんじゃねえよ、しっかりしろ。」

「割と真面目な話なんだが……。」

「先にそれを言えよ、もう。」

一々勿体をつけてじれったい奴である。彼はようやくその内容を告げた。

「っ！？て、おい、そんな重要なことおれには関係無いだろう。」

「と言われましても国からの指令なんだから仕方ない。ちなみにだが、おれもなんだ。」

彼の声音は先刻のものとはうって変わって真剣な色を帯びていた。

「は？おまえもなのかよ。なんでそんな重要な指令をおまえからつたえるんだよ！？意味わかんねえ。」

「おれだって知らないさ。まあ、とはいっても最初は面接みたいな

もんだから、まだおれたちが採用されるかは決まってる。とにかく明日の8時にさっき言った例の場所までこい。以上だ。」

相手はそれを言い終わるとすぐに通話ボタンを切ってしまった。

「ツーツ、ツーツ、ツーツ、ツーツ、……。」

「お、おい。まだ切るなよ、もう。」

かくいう訳で現在とあるビルに向かっている。どうも胡散臭いなあゝと感じたのでしらはつくれようと思ったのだが、それから約一時間後に例の場所から封筒が届いたのだ。どうやら本当らしい。

「招集指令を受けた方は、このカードキーを必ずご持参ください、
だど？」

疑問符まみれだった頭もとうとう睡魔に襲われて眠りに落ちた。再び起きてそのカードキーがあることを思い出したしかめっ面の顔を洗い、朝食を手早く済ませた後支度をして家をたったのであった。

「咲島科学技研宇都宮支部オフィスビル」

目の前には地上40階はあろう長高層ビル。頂上を真下から見上げると首がほぼ垂直になって痛い程だ。無駄に凝った正面玄関の金文字のプレートを見て彼は思った。

「……何かの手違いではないだろうか？このおれが呼ばれるなんて。」

「やあ、ちょうどいい。」

「な、成島……！」

声に気づいて振り向くと、すぐそこに成島の姿があった。紺のスーツにピンク色のストライプ柄のネクタイ。背も高くスタイルも良いが、久しぶりに見る彼の顔は相変わらず闇医者のようなだった。

「何故おまえがここにいる？」

「何故って、おれは昔から嘘だけはつかないんだ。」

彼の言ったことが改めて本当だったと知らされて思わずげんがりする。確かに彼は悪役面ではあるが、長いつきあいからつまらない嘘はつかないことを知っていた。同時に背筋には悪寒が走る。

「じゃ、おまえ先行け。」

「おまえが先に行けよ！！」

厚かましいところも学生時代から変わらない。こうして彼らはオフイスの中へと足を踏み入れた。

出発の前

翌朝目が覚める。心なしか体が重い。やはり昨日のことが引つ掛かっているのかと自分で思う。父に叱られたこと、それから留萌が聞いたという母の言葉。昨日行くと心に決めたにもかかわらず、今日になってみるとやはり気持ち揺れ動いた。しかし今度はまた別の理由によるものだ。親から待遇を差別されている留萌と自分が一緒に行くと言ったら留萌が嫌がらないだろうか？勿論相手に直接聞くことなんて出来ない。結局は自分の判断に頼るしかない。だがOKを出してしまった以上また断るのも正直気後れする。現に彼からの返信がこう語っていた。

「なんだ、結局来るのか。まあその方がいい。留萌が来るのにあれ？と思ったけど。樟葉からはまだ連絡が来ない。4人が3人で少ないけど、明日後の17日午前6時に宇都宮駅集合。では。」

留萌は相変わらず拗ねているのか自室にこもりっぱなしのようだった。この状態はあまりよろしくないと、二階に上がり彼女のいる部屋をノックしてみる。案の定反応は無かった。少々憚られたが仕方なくドアを開けてみた。あれ？いなかった。いつの間に出かけたのやら。恐らくまた中学の友達と何処かへ行っているのだろう。机の上には黒い表紙の小冊子が置かれている。義妹の部屋には普段入らない。しかしその小冊子は何なのか気になったのでいつの間にか入っていた。机上のそれを手にとる。ページをめくると、それが家族写真のアルバムであることがわかった。勝手にこんなものを見たら怒られるだろうと気が咎めたが、彼女の幼き日の写真に思わず目が釘付けになってしまった。普段見慣れたアイツだが、昔はこんなだったのだと。そして、今は亡き家族達に囲まれてニッコリと幸せそうに笑う彼女が何とも微笑ましかったと慈母でもあるまいが。

留萌西瓜。彼女は10才の頃、両親と兄を交通事故で亡くした。当時骨折していた兄が無事退院することになり、彼を両親が迎えに行った矢先のことであるという。彼女はその時ピアノの発表会だった為に両親と一緒に病院に行けなかった。両親が兄を迎えに行った後、その足で3人そろって彼女の発表を見に行く手筈となっていたのだ。彼女はとても張りきっていた。兄の退院祝いと題して自らの晴れ舞台を家族に見せる……。そんなつもりで会場に控えていたのだ。しかしずっと心待ちにしていたその時は永遠に訪れることはなかった。病院から会場へ一本の電話が届いた。それは不幸の報せだった。交差点で大型トラックに撥ねられた車が大破したというのだ。即死だったという。あまりの突然でショックな出来事に彼女はその場で卒倒してしまっただけ。身寄りの無い彼女は程なくして児童相談所へ預けられた。そこでの生活は非常に窮屈なものだったらしいが、本人はあまりそのことを話さない。しかし、どうやら職員からの虐待を受けていたらしい。それに見かねたある人が全国里親の会を通して彼女を里親つまり、現在の彼方の両親に託し、今に至る。申し出たのは父だったという。母は最初自分の家で養っていく自信は無いし、増して難しい年頃の子だからと反対していたが父の粘り強い説得で渋々承諾した。父は何故そこまでして留萌を引き取ったのか？一見すると変な誤解を抱く。しかし実際のところは今だに謎であった。

彼女が帰ってきたのは夕方5時。スーパー袋を両手に下げていた。

「お帰り」

「ただいま」

「気分は晴れたかい？」

返事は無い。藪蛇だっただろうか？何か気の利いた言葉は無いだろうかとやたらと逡巡している自分に気づく。

部屋の中は暫くの間沈黙によってのみ支配されていた。いや、実際

の時間はもう少し短かったに違いない。

気分の重さが時間に架空の質量を産み出し、体の何処かにある時計が刻む時の歯車に重しをかけているという妄想すら抱いた。張りつめた空気。質量はついに空間にも達した。

「結局どうするつもりなんだ？」

その場の雰囲気になえられなくなって出鱈目に口火を切った。

「この期に及んで私に判断を委ねる訳？あんたって本当に無責任で愚図よね。」

言わずもがななことを言ってしまったと気づいたに時は既に遅い。こうなってしまったならもう行かない。そうするしか方法はないだろう。

「まさか今、じゃあ行くの辞めようかとか言おうとしてないよね？」
「え？」

心の中を見透かされたような言葉に思わずギョツとする。留萌は昔からこういうことに関しては鋭い。同時に意外すぎる言葉の展開に少し戸惑う。自分の中ではもう留萌は北海道に行きたくないものだと決めつけていた。

「ほら、やっぱり図星ね。ちなみに私の中ではもう答えは決まってるんだ。」

「決まってるって、まさか……。」

「そう、そのまさか！私はお兄ちゃんと北海道へ行く……！」

昨日までショックで萎れていた留萌の面影は何処へやら、微塵も見

当たらなかった。揺るぎないその眼が訴えているのは本気と書いてマジと読む例のアレだ。だが、ここで一つ疑問が浮上する。

「でも思っんだが、そうするとお前は俺達の親の思惑に乗るってことにならないか。」

留萌から聞いた話で知る限り、少なくとも母親の方は留萌を札幌にいる親戚に里親に引きとってもらいたいのだ。要するに彼女が北海道に行くということはとりもなおさず母親の意向に承諾した態度をとるということを意味する。

「乗らないようにすればいいじゃない？」

「…………乗らないようにすること…………。行ったつきり自分で向こうで暮らすという意味だろうか。ならば話は違ってくるのだが。」

「向こうで独り暮らしとか、無謀を通り越して愚かな。」

留萌の楽観的な様にほとほと呆れた。あまりのショックで頭がおかしくなったか？

「まさか独りで尻尾巻いて逃げるだなんて、カッコ悪い。2人暮らしすればいいことじゃない。」

そうじゃないだろ。ああいえばこういうの典型例といったところだ。

「でもそしたら俺まで親に勘当されるし、高校の転入試験も受けなきゃいけないって面倒なことこの上ないよ。」

「さっきから親が親がって鬱陶しいわね！！私なんてもう勘当され

「たも同然なんだからね。」

留萌は不機嫌そうに尚も続ける。

「そりゃ私だつてそれなりのリスクを覚悟してるよ。でもこの際か
けてみることにした。いや、かけじゃない。これは本気。」

そう畳みかけられた彼方は完全にその場の雰囲気気圧された体である。確かに自分の立場は留萌とは違う。自分はまだ彼女と違って親に面倒を見てもらえる。だが、罪も無い留萌を訳もわからずいきなり引き離すような親に尻拭いしてもらうというのも実に虫が良く寝覚めの悪い話である。ここに居残るということはつまり自分まで彼女を裏切るということになり、彼女のことを誰よりも不憫に思う自分にとつてはどうしても避けたい事態であつた。しかし、正直なところ２人だけで、しかも全く馴染みの無い土地で生活する自信はまだ全くといっていい程無かつた。それ故受け答えも必然的に曖昧なものになる。

「言いたいことはわかるよ。わかるんだけど、ちょっと考えさせて
おくれ……。」

「何よ、煮え切らないわね。」

留萌は自分なんかよりよっぽど肝が据わっている。と言うよりも寧ろ器用なのだ。中学まで部活と勉強を両立している上に成績だつて彼方よりも優秀だし、ある程度自分に自信があるのだろつ。それに比べて彼方は何をやるにつけても不器用だ。特に時間の管理が大の苦手で毎日の生活は不規則だし、提出物が間に合わなかつたなどといったことは日常茶飯事である。しかし、考えてみれば大学に行つたらどうせ自分も独り暮らしをしなければならぬ。不器用などと言ひ訳は通用しない。遅いか早いか。善は急げという言葉の表すよう

に、遅いよりは早いほうがいいという二元論はこのケースに当てはまるだろうか。いや、当て嵌める。……でないとはモまっしぐらだろうかという自分の内心の突っ込みに寒気がするが、ここは敢えて平常心を装うように努める。

「ブーツ、ブーツ、ブーツ、ブーツ、……。」

内心の動揺を代わりに表現しているような皮肉なバイブレーター音に内心舌打ちした。

「樟葉だと？」

メールはたいてい光貴から来るので、どうせ行けるか行けないかの連絡だろうと安直に構えたのが間違いだった。

「ん！？結局こいつも行くのかよ！しかも『切符はもう全員分買ったから当日金用意しろ』………っておい、早まるなよ！！俺にはまだ猶予があつた筈だぞ！？」

居間のソファで本を読もうとした留萌がしかめっ面になる。

「お兄ちゃん声でかい。それに今更辞退するなんて私許さないからね！！」

横目でジロリと睨まれて不意にすくみあがる。ステータス的には恐らく自分の方が弟なのではないか。

ともかくにもこんな経緯を経て北海道へ行くということが決まった。決まったとわかった瞬間の自分の顔は恐らく半分泣いていただろう。

成島に背中を押さながらビルの中に入ると、中は表とは対照的に閑散としていた。グレーを基調としたエクステリアは落ちついていて、タイルではなくマッドレスを敷きつめた床はどこか観光ホテルのフロントを彷彿とさせる。中央には和とモダンを掛け合わせたような洒落た中庭まであるのに、なぜか照明が点いていない。全国に支部を10以上も抱えている大手組織とはいえ、一体何処からこんな金が湧いてくるのだろうか？と、目の前の先の方に自動改札口のようなものがあることに気づく。

「おい、ひよっとしてあれか？」

隣にいる成島へ目配せをするが、彼の表情も何処か訝しげだ。

「恐らくそうだろうが、何だよこのふざけた待遇は。案内人の1人や2人いてもいいだろう。」

彼の意見は真つ当である。いくら日曜が休業だからとはいえ、人気も無ければ電気もついていないなどどう考えてみてもおかしい。

「踵を返すか？」

「せっかくここまで来たからまあ行つてやろうじゃないか。」

相方は一応のところ進むらしい。そうしようと返事が着たら彼もろともしらばつくて、後に連絡があったら誰も居なかったのと言いつつ、い訳をすればいいと思つたのだが、案外と成島は真面目というか、好奇心で動いている。

「んで、こいつをスライドさせると」

案の定ゲートが開いた。先に進めという意味らしい。そう言われましてもどちらへ行けば、と考えあぐねていると、相方がカードを通すのに手こずっているのに気がついた。

「こういう時に何ドジってるんだよ、勘弁してくれ。」

「ドジじゃない。カードキーエラーの為通り抜け出来ませんとか表示されてる。」

確かに成島がドジるなんてあまり無いよなあと冷静に考えつつ、後ろからは案内人と思しき女性がノコノコとやってきた。

「あの、遅れてしまつて大変申し訳ございません。案内人の手塚結衣と申します。」

ここに入つてまだ間もないのだろうか、挨拶がどこかきこえない。

「自己紹介はいいからはやく中へ入れてくれ。」

成島がそう叫ぶと彼女はいそいそと執り成した。

「ああ、申し訳ございません。恐らくカードの情報入力操作ミスです。今すぐ新しいものを持ってきます。」

出だしからこんな調子でなにやら頼り無い。

20分以上が過ぎた頃だろうか？彼女はようやく情報を入れ替えたカードを手にもこちらへ戻ってきた。

「申し訳ございません。永らくお待たせ致しました。」

「あ、いいのいいの気にしないで。」

成島が気を利かせて言う。

「しかし、手塚結衣って尻かきたくなる名前だよな」

思ったことをすぐ口に出してしまう成島の悪癖がついに現れた。

「コラッ！！人前で何言うかこのセクハラ藪医者！！」

「だっておまえだって心ん中では同じこと思ってただろ」

「平気ですよ全然。小さい頃からしょっちゅうからかわれていたの
で。なんなら貴方のお尻でもかきましようか？」

初対面の男にこんなこと言われてよくもまあ動じないどころか冗談
を返してくるなんてこの人のメンタリティーはどうなっているのか
と呆れるというより疑問に思う。からかわれる過程でこうなったの
か、それとも生来からこうだったのか。成島の方を振り向く。ふむ、
顔は二枚目までとはいかないものの、端正であることは確かに認め
る。但し性格は限りなく終わっているが……。

「なんなら僕と結婚してその名前変えちゃいませんか！？」

はあ——————。いきなり何を言い出す
マジでこいつの終わり様は毎回想像を絶するという有難くも無い寧ろ
迷惑な約束を裏切らない。もうこれ以上一緒に居て恥ずかしい思
いをさせないでと懇願したところで奴には届かないだろう。調子に
乗った彼を最早誰も止めることはできない。

「あのお、誠に恐縮なんですがあ、コイツを叱った俺の立場はどう
してくれるんですか？」

「ああ、つい調子に乗ってしまいました申し訳ございません」

ああ、じゃないだろうがという言葉を飲み込んで、素直に謝ったから許すことにした。

「でもさ、そのカードキー渡してくれないと僕は君の元へ行けないよ？」

「だからお前はすぐそうやって他人に色気を遣うの辞めろって何回言ったらわかるんだよお！！」

俺は心底泣きなくなった。お呼び出しをくらって潰れた休日がこの様だ。^{ザム}

「あら、残念ながら私はもう既に結婚済みです。生憎というか偶然というか旦那が同じ名字だったもんでテヘッ……。」

俺の意見をスルーして案内人はどうでもいい私事を語る。と、それを聞いた成島が心底泣きたそうな顔を露骨に呈していた。待て、そんな顔して許されるのは今この状況においてどう考えたって俺の方だろう。

「わかりました。じゃあ僕帰ります。」

おい、今日俺たちは何の為にここへ来たんだ。それでもお前は大人か。

「なぐんで、冗談で・す・よ。ちよつと拗ねてみただけです。」

「不謹慎にも程があるだろ。次同じようなことやったら殴るぞ！？」

成島の暴走にいい加減腹が立ってきた。

「おや、殴るとはまた物騒なことを仰いますね。」

しれっとした顔で言ったのは彼女だ。何つつ嫌味だ。コイツのこの性分は素なのかそれとも天然か？つかさっきの謝罪返してくれもうヤダお家に帰りたい。

「そうだ。君には僕の洗練されたジョークのセンスがわからないんだ。」

ああわかりたくもない。何を言っても無駄だという崇高な悟りを開いた俺は無言でスルー。そこでようやく新しいデータのカードキーをスライドさせた成島が入ってきた。来るな変態。

「ではお2人にはこれからシェルターへ移動していただきます。」

ここまで正味10分。なのに何故か疲れが半端ではなかった。

「でも、シェルターって地下にあるんだろ？このビルの上の階に行つて誰かと会うとかそういうのじゃないのか？」

「本来ならばそのような手筈となると思うのですが、先日のつくばでの騒ぎがあつたのでなるべく安全な場所での会議と致します。」

なるほど。いくら支部とはいえ同じ組織である限り相手が襲撃してくる可能性は否めない訳だ。そこまで警戒しなければならぬ程に緊迫した状況なのだろう。

「電気が消えているっていうのはつまり、そういうことか？」

成島が尋ねる。

「それもありますが、照明や扉のロックといったものは全てコンピュータに依存していて、外部から何者かによってハックされることを防ぐためでもあります。」

「デボラシステムみたいなものか？」

「何だ、デボラシステムって？」

成島が初耳といった調子なので説明する。

「人が動くとそれに反応したセンサーが局所的にその人の周りだけ照明をつけたりとか、音声で人を認識して部屋のロックを外したりするやつとか。森博嗣さんの書いた『すべてがFになる』っていう推理小説に出てきたな。」

さすがは咲島技研。そんなハイテクなものを採用していたとは知らなかったの少し驚いたが、今回は逆にそのハイテクが仇となっている。つくばのセキュリティシステムがハックされて誤作動したとなれば、ここも停止するより他がない。

「じゃあ、あの改札みたいなのは関係無いんだ？」

「そうですね。ここに入る者は原則あそこをカードキーで抜けるという決まりなので。この後すぐに封鎖しますけどね。」

「何か色々大変そうだなあ。」

研究員の抜かり無い対応に思わず詠嘆せずにはいられない。そして俺たちは案内人の手塚を先頭に地下のシェルターへとつづく回廊を下っていった。思ったよりも距離が長い。さらに奥にある階段を降りて出た場所は何処か見覚えのある場所。列車のプラットホームだった。

「え、まさかまだ続くのか？」

ここで終わりたいきや、まだ先にあるみたいだ。

「これってもしかして非営業路線？」

「そうですね。首都圏新都市鉄道北関東縦貫線につながってますけどそちらの方面は今シャッターが降りてます。」

コンクリート打ちっぱなしの無機質な壁はいかにもといった感じの地下駅だ。

上り方面2番線に停車していたのは川崎重工製で最新鋭の汎用特急型交直流電車ことTX-3000?系である。無塗装にアルミ合金というスタイルは創業以来変わらないものの、省エネに優れた次世代インバーター制御装置は勿論のこと、広軌狭軌の何れにも対応した可変軌幅台車、カーブ区間で高速運転が可能な車体傾斜装置を搭載している。設計最高速度に至っては430km/hと許容限界最高速度が230km/hという路線規格では大幅にその性能を持て余すが、近い将来に計画されている路線規格変更及び新幹線乗り入れ構想を踏まえたものである。尤も現状JR側は断固反対の姿勢を貫いているが、世界有数の財力を持つ咲島技研が株を握っているTXである、可能性は十分でないがある。発足当時は単なる第三セクターの中小私鉄に過ぎなかった首都圏新都市鉄道が、ここまで成長したのは歴史上類を見ない。

車端部に目を移すとデッキの中に不機嫌そうな女の顔が覗く。ホームドアと車両の扉が順序良く開くなり、女は駆け出してきた。すると横にいた手塚は彼女におびえて後ろへ駆け出す。が、そのさらに後ろはプラットホームが無く、転落防止柵の行き止まりだった。

「遅いつ!!今まで何をしていた!？」

逃げ場が無いと悟った手塚はビクビクしながら彼女に言い訳をした。

「すっ、すみません……。あのぉ、こちらの方のカードキーがエラーを起こしてプログラムを書き換えてたんです……。」

俯きながら呟く彼女の声は消え入りそうだった。

「それにしても遅すぎる！！私だったら5分もあれば出来るというのに30分以上も遅れるなんて俄かに信じ難い。」

彼女の凄まじい剣幕に俺と成島も咄然とする。と、こちらの様子に気付いたのかまるで変身人形のように180度違った笑顔でこちらを振り向いた。完璧過ぎる営業スマイルがその恐しさをさらに際立たせる。

「そちらは例の招集がかかったお2人さん？」

「は、はい。」

「私は先月から配属になった咲島技研宇都宮支部指令補佐の長瀬という。」

そつの無いその挨拶も手塚とは対照的に引き締まったものだった。

「あの、俺たちが向かうシェルターって一体何処にあるんですか？」

成島が拳動不審に尋ねた。

「そもそも俺たち2人が何故呼ばれたかもわからないんですが……。」

成島に追隨するように俺も問う。

「君たちはこいつから詳しいことを説明されなかったのかい？ 全く何処までも使えない奴だなお前は。いいから2人とも私について来なさい。」

言い終えた直後、長瀬は手塚の脛を蹴る。蹴られた手塚は「グヘッ」という情け無い声を出してその場にズッコけた。先程の意趣返しではないが、内心ざまあみろと思ったことは誰にも内緒だ。

「あのお、俺が言つのも何ですがその、そこまでやらなくても・・・。」

成島がしどろもどろと余計なことを口走る。

「君も一緒にやられない口かい？」

頬に皺が寄って前歯が覗いていたが、目は全く笑っていないどころか絶対零度よりもはるかに下の空気を帯びている。うつつ、この人恐っ・・・。

何しろあの咲島技研だ。しかもこの人は指令補佐。超エリートな上にそれなりのランクがあればこれだけの貫禄は嫌でも付いて回ることだろう。だがそれを差し引いても手塚とはギャップがありすぎる。

「や、やっぱり何でもないです。」

その形相を直に受けた成島が即座に畏まるも相手は容赦無く突き放す。

「何でも無いって今更撤回しても無意味。」

「先輩、この度は本当に申し訳ございませんでした。」

蹴られた脛の痛みがようやくひいて立ち上がった手塚が謝罪するも無視。一体この人はどれだけクールなんだろうか。

「こちらの列車でも行けないことは無いけど直通エレベーターの方が早いからそれに乗って。」

彼女はそう言いながら俺のすぐ隣にあったエレベーターを指す。

「あれ、でもデボラは大丈夫なんですか？」

「今は警戒レベル1で万が一の場合も脱出出来る設計だから大丈夫だ。」

俺たちは納得してそれに乗り込んだ。

中は全面ガラス張りのスケルトンという以外はごく普通のエレベーターだ。地下3階で一度止まる。すると長瀬はボタンのわきにあるレールにカードをスライドさせ、何やら意味のわからない言葉をブツブツ唱え始めた。何かの暗号らしい。

言い終わると再稼働。階数表示は地下3階までだが、エレベーターはさらにその下を下ってゆく。と、暫くして見えた光景に息を呑んだ。

「うわ、凄い！！このオフィスの下にこんな広いスペースがあったなんて！！」

眼下に広がるのは大天蓋の下に密集する建物の群。さらに下るとその建物はビルの集まりで、建物同士が空中回廊で繋がっていることがわかった。言葉で言い表すならシエルターというよりまさにSF映画の地底都市。

「ま、本部咲島の水上市に比べたら綺麗さで劣るけどね。」

「それにしても凄いですよ、こんなものがあのオフィスの下にあったなんて知りませんでした。」

「当たり前だよ。国の重要機密事項なんだから。」

気が付くと視界が再び暗転。どうやら地下の建物に入っただけらしい。

「もうすぐで下に着く。出たら会議室へ案内するからついて来なさい。」

下に着いたと思ったエレベーターが今度は横に動き始めた。程無くして扉が開かれる。現れたのは先程のオフィスと同じモチーフの廊下。エレベーターのゴンドラの横には先程見たのと同形式のTX-3000?系が停車していたのがガラス越しに見える。

「地上から物資を運ぶ為に一応線路が繋がっていてね。」

何やら先程とは違って変わってワクワクしてきた。成島も周囲を物珍しそうに見ている。手塚はというとまだ先刻蹴られた脛を庇っていた。そして、一同は長瀬を先頭に会議室へ入った。

事の発端

指定された時刻通り駅のコncourseへと歩を進める。最早踵は返せない事態になってしまったのは樟葉くすはのやつてくれたうっかりが発端だがいつそのこと背水の陣で行けば何とかなると腹を括くわるしかない。寧ろこれは日頃から優柔不断な性を見咎めた神様からの天啓てんけいかもしれない。隣を歩く西瓜は終始無言の表情。現在最も彼女に近いはずの自分だが、物理的な意味を必ずしも実質に反映しない。元々人の感情の機微に鈍感なせいもあるが、それは会話というタイムリーな場において特に顕著であるなどと自己分析したところで埒が明くこともない。目的地へ辿り着くと案の定そこには光貴以外誰もいない。

「やあ、お早う。」

普段から真面目な彼。挨拶もいつもと変わらず清々しい。

「んで、例の問題児は何処だ？」

慎みの無い言葉に西瓜が睨んでくるが構わずに続ける。

「今トイレだけど。」

なんだ、あいつもう来ていたのか。というか問題児と言ったことは**はんぱく**反駁しない辺り光貴も無意識にそう認めているのだろうか。

「優柔不断の甲斐性無しよりはよっぽどマシだと思っけどね。」

西瓜に痛いところを突かれた。

「どうせ今回彼がこんな事態に導いてくれなかったら例によってエスケープしてたでしょうに……。」

彼女に凶星をさされて思わず言葉に詰まる。と同時にそこまで小心者と評価されていた自分が恐しくなった。さらにそこであることに気づく。まさか……。

「やあ、悪い悪い。待たせたな。」

「おう、樟葉。2人ともちようど来たところだよ。」

そのまさかを問い質そうとしていたところにタイミング悪く樟葉が現れる。畜生、一回休みだ。

「それじゃあ行こうか、お兄ちゃん。」

「毎回ながら思うが彼方、同世代の女の子にお兄ちゃん呼ばわりされるなんて羨ましいことこの上無いわなあ。」

樟葉は自分たちの実情をこのメンバーの中で一番知らない。恐らく同居しているということも。どこまでも恵まれない境遇にいる西瓜に対して自分は確かに誰よりも同情しているが、男女間で生じる思慕所謂恋愛感情は皆無だ。またそれとは無関係ではあるが一方でしただたかで器用な妹でもある。

一行は新幹線ホームへの改札をくぐった。

「さあ、これで後戻りは出来ないわね。」

西瓜が不敵な笑みでそう呟いた。

「これで私もゲームに参加出来るって訳ね。」

「ゲーム？」

西瓜の謎めいた言葉に反応したのは光貴だ。

「なに、ただの独り言。欲しいゲームをオンラインで予約したからちよつと浮足立っちゃって。」

西瓜はしれつとそう言い放った。

「ああ、そういうことね。んで、どんなゲーム？」

樟葉が早速喰いついてきた。

「ちよつとマニアックでヒクかもしれないからナイショ。」

「へえ、これから旅行でもゲームが待ち遠しいのかあ。」

そう言ったのは光貴である。一見何気ないやり取りだが何か引っかけがある。光貴が今まさに言ったその言葉によつてその思いがより強調された。だが何となくそれを言うのも憚られたので言葉を飲み込んだ。

「てか俺の質問ガチでスルー?? 酷くない!? 俺だつてffとかモンハンとかやるつてのに……。」

喧しく抗議する樟葉と不思議そうな光貴を背後に所定の車両へと一足先に歩を進める。彼方は列車乗り換え等の誘導担当なのでそうしているのだが、西瓜がポンと肩を叩いて唐突に言った。

「君の無意識にはイキタイって反応があるよね……………」

耳元で後の2人には聞こえないくらいの小さな声でそう囁いた。
思わずゾツとせずにはいられなかった。

「って、何おびえてるのお兄ちゃん。からかつてるんだよ、わからないかお主。」

「わ、わかるわそれぐらいアホウ。たくう、最近ますますふてぶてしくなりやがってもう。」

直前の囁きが嘘のようにあっけらかんと言いつたが、それがかえって不吉なことと思えた。

旅行に不吉などという単語はそぐわない等と考えながら彼方は切実にそう思った。

目的の部屋に入るとそこには2人の男が座していた。部屋は思った程に広くなく、寧ろ狭い。足長で角ばったシンプルでエレガントなガラステーブルの向かい側右に座る男は爽やかで、しかしその瞳孔は鋭くどこか威厳のある精悍な顔つきをしていた。

対して左側の男は威厳というよりも威圧的な雰囲気勝っていて、体格も良く厳つい印象を与えた。

「指令そして部長、長らくお待ちさせて誠に申し訳ございません。」

長瀬が部屋に入るや否や畏まった第一声を発しながら深くお辞儀をする。隣の手塚はきよんとしていたが、長瀬の手で無理やり背を折られて彼女もお辞儀をする。見ているこちらが恥ずかしくなりそうだ。

「仕事は抜かりなく速やかにな。」

厳つい方の男が言った。

「はい。」

2人は今度は声をそろえて返事をした。そして長瀬は俺達の方に手を差し伸べて、

「こちらが例のリストの者です。連れて参りました。」

と言った。リストという言葉が妙に仰々しい。

「かねてより本案件の担当責任者を抜擢する者である、とりあえずすわりたまえ。」

左側の男がこちらに向き直って言ったので、俺と成島は一礼し、手前にある椅子に腰かける。

「私が宇都宮の人事担当部長、相良と申す。同じく本支部の指令、咲島優一だ。」

その名前を聞いた瞬間俺は思わず跳び上がりそうになったがあわてて我に返る。

咲島優一といえば現在の日本国民なら誰もが知る咲島技研の得宗的存在で、咲島家直系の幹部代表に当たる。そんなとんでもなくお偉いさんが今この目の前にいるなど何かの間違いだと疑わない方がおかしい。

「咲島本部指令が宇都宮支部を管轄するなんておこがましいにも程がありますよ。」

成島が真つ当なことを言ったがそれはこの際言つべきことではない
案の定言葉を慎むことを知らぬかねと言わんばかりの形相で男は成
島をギロリと睨む。その有無を言わさぬ圧力にこちらまでもがヒヤ
リとした。やむを得ず自ら会話を取り成す。

「これはその、つまり、どういふことですか？」

言葉を慎重に選びながら、というより出し惜しみながら成島と同
じ疑問について尋ねる。

気づけば部屋の向こうにある給水室から手塚が思い出したようにお
茶を持ってきた。

テーブルの上にぎこちなく置かれたそのお茶に誰も手を付けようと
はしない。

長瀬はというと、背後にある扉の脇に身構えて動かない。こちらと
しては完全に身動きが取れない状況だ。

「各質問等には最後に応答する。その前に先ず本案件に関する趣旨
と任務についての説明にあたる。」

「部長、少々お待ちください。彼らの質問から答えても特に差し障
りは無いでしょう。」

そこで初めて口を開いたのは右に座していた指令こと咲島優一であ
る。

「現在本国には20才男女成人から35才までの何れかの期間に2
年の兵役義務があるのは周知の通りだろう。」

優一がこちらに向き直って言う。

「しかしその中のごく僅か、政府は今年から例外を新たに設けた。それが本案件に携わる精神破壊者サイコバスターの指名で、彼らは全国の中から一定数指名される。指名を受けた者は兵役を免除されて、代わりにその特殊プログラムを遂行する。」

成島が固唾を飲む。俺も緊張で全身が固まる。相良が後に付け加える。

「任期は同じだが情報は当事者にしか開示されない。咲島技研と政府との間にはプログラム概要の秘匿を死守する協定が既に整っている。」

「しかし、そんな重要な任務に我々が携わるのは何故ですか？」

相良が躊躇して優一の方を向いたが、優一は頷いた。話しても良いという意味らしい。

「君はカウンセラーだね？」

「そ、そうですが……。」

「ならばこれから話すことについても是非中立的な姿勢で望んで欲しい。」

心理カウンセラーとは人の心を臨牀的に扱いケアする職業であるが、その基本理念として絶対に欠かせないのが「客観性」や「中立性」といった要素であることは既に知っている。余程揺れやすい話なのだろうか。

「心のケアに携わる者の資質を総動員して精神を破壊するプロジェクトには是非協力してくれないか？」

「それはどう……。」

言い終えた刹那、ガタリと音がした。振り向くとそこには小型の鉈を片手に血眼が走った手塚の姿があった。

百聞は一見に如かず。気付いた時には左頬のすぐ横を刃が霞めているのを反射的にかわしていた。計略に掛けられたかと一瞬思った時だった。

「おっと、おどかしてすまない。」

手塚をもう一度見ると手には何も持っていないくて、表情も元に戻っていた。

「今手塚君にやってもらったものが精神攪乱実体化装置のごく初歩的なものだ。」

「精神攪乱実体化装置!？」

初めて聴く言葉に思わず2人の言葉がそろつ。ごく初歩的と言ったがそのリアルさはとんでもない。

「仕組みは至ってシンプル。対象の脳内にあるグルタミン酸受容体に干渉し、瞬間的に幻覚を見させるという訳だ。」

なる程。この仕組みがく夢中の陰剣>のメカニズムに関連しているという訳だ。しかし、先日つくばで起きた事件では管内のシステムがハックされ、人が切り刻まれた。

「夢中の陰剣はこれをさらに発展させたものだ。攪乱だけではなく幻覚を実体化させてしまうという恐しい機能が付いている。な、手塚君。」

「は、はい指令。」

先程の手塚の幻覚からは想像出来ない程におどおどした返事だ。

「実体化というのは個人差がある。今君に見えたものは何だったか？」

「小型の鉈です。」

「後ろの君はどうだった？」

今度は成島への確認だ。

「料理包丁なのでほぼ同じです。」

言い終えた指令は部長と顔を見合わせて頷いた。どうやら合格ということらしい。

「そのくらいの耐性があれば2人とも申し分無い。人によっては大型の鎌や矛、日本刀等が見える人もいるからな。」

「おかしいですねえ、私はちゃんと日本刀をイメージしたのですが。」

手塚が残念そうに呟いた。相良は苦笑しながら

「逆におまえはまだまだ訓練が必要だな。」

とからかうようにいった。

「ともかくまあ、攻撃する者と受ける者の技や素質で相手に攻撃したり、攻撃を回避したり出来る訳だ。君達には素質がある。だから我々が目を付けて採用に至ったという訳だ。無論君達にはこれから

トレーニングを積んでもらうがな。」

相良は上機嫌そうに言ったが、こちらとしてはまだまだ疑問が絶えない。

「それだったら研究員で人選すれば良かったじゃないですか。意味がわかりません。」

「夢中の陰剣を取り返すだけが目的だったら我々もそうしただろう。現に特殊部隊を編成しているからな。しかし悪いことにもう一つの懸案が浮上した。」

「そのもう一つとは？」

成島が隣で納得したような顔をしている。何故そんな先読み出来るのか？

「蓬菜ほうさいから招かれし使徒の身柄を安全に確保することだ。」

そこで俺もやっと気づいた。蓬菜とは今では一般に過去の世界等を意味するやや古典的な言葉だ。JAXAがつい最近九州と本州を結ぶ日本初の海底トンネルである関門トンネル内に原因不明のワームホールを発見し、話題になっていたが何者かが投下した爆雷によって破壊され、塞がれた。それと同時に今度は世界一の長さを誇る青森県と北海道を結ぶ海底トンネルである青函トンネルのちょうど真ん中にあたる地点で関門トンネルの時と同様のワームホールが出現した。現在青函トンネルの役目は海上ブリッジの青函ブリッジに切り変わっており、営業用としては使用されていない。一般人は誰も入れない筈だが、それを目に付けた未詳組織がまた爆弾を投下しかねないということで、咲島技研としてはその最悪な事態を避けたいとのことだ。

「つくば技研の被害が無ければ恐らく人手に困らなかつただろうが・
……。何しろあそこに全10支部のうち全体の5割以上がいて、
その殆どが失われた。」

相良が苦い顔をする。負傷者の中に知り合いもたくさんいたことだ
ろう。指令の優一が続ける。

「まあともかく、『北の防人』とでも呼ぼうか。こちらの方がプロ
ジェクトとしてはリスクが高く、僕が指揮をとらざるを得ないんだ
よ。」

「はあ……。。」

「尤も研究員がやればリスクは寧ろこちらの方が少ないが、生憎く
夢中の陰剣>を巡る戦線に全員投入せざるを得なくなった。く夢中
の陰剣>を取り戻す為にはそれ程高度な技量が要求されるしかなり
手強い。」

優一がその端正な顔を険しい色に染める。指令としてもかなりの圧
力を感じるのは至極当然であろう。ともあれ、やっと事の全貌が見
えてきた。その後の優一の話によると、長瀬はく夢中の陰剣>奪還
プロジェクトの最右翼として指揮に当たるといふ。彼女は指令を差
し置いてそんな僭越せんえつなことは出来ないと固辞したが、余程有能と見
ているのだろう、彼はそれでも指揮にあたれと言ったそうだ。それ
に戦線においてはその指揮も大切だが特殊部隊の研究員の技量の方
がはるかに重要で、その点は信頼しているという判断もあつたよう
だ。

「研究員成功した暁には咲島技研の正規研究員として採用するとい
うオプション付きだが、どうだ？」

我に返ると相良が俺たちに問うてきた。このプロジェクトがどれ程

難しいものなのか想像がつかないが、成功した暁につづく美味しい言葉につい釣られてしまった。

「喜んでお引き受けします。」

「おい津村、悪い冗談じゃないだろ?？」

今の自分はひよつとしたら正気ではない。だが成島の制止を振り切つて気がついたら紙に署名していた。

「今断つたところでどうせ兵役が来るんだ。今やるべきことやった方が後々スッキリすると思つてな。」

「……それもそうだな。」

成島も納得したようでやつと紙に署名したようだ。

「これで後戻りは許されんぞ。」

相良が野太い声音で莊嚴に言い放った。

「しかし、君達には絶対後悔させないように善処する。だから諸君も是非頑張ってくれ。」

そう言つたのは優一だった。今頃気づいたが、指令である咲島優一は本当に指令なのかと思うぐらいにおひとよしだ。とにもかくにもこういう訳で俺たちは指令の命名した『北の防人』に駆り出されることになった。

t o b e c o n t i n u e d

漆黒と桎梏

砥陵17年、福岡県博多特別市。私は町の中を独り闊歩していた。向かい側のビルの壁面にこつん、こつんと反響するのは自分の靴の音のみ。今時外の世界へ出ようとする者はほとんどいない。この町でも私独りぐらいじゃないだろうか。朝日が煌々とアスファルトを照らし、建物や私、路肩に乗り捨てられた車の影を地面に縫い付ける。その陰影は日の光よりも色濃く禍々しいまだった。人類は太陽を敬うことを忘れてしまった。代わりに太陽など自らの手で作れるのだという人類の傲慢さがこの町を支配している。その昔、日本と分裂する以前のこの町の人々は太陽を敬い、町は活気に満ちて、様々な文化が交錯していたという。今では見る影も無い。

「ププーッ!!」

単車のクラクションが悲鳴を上げる。燃料電池車なのでエンジン音がせずその存在に気づけなかった。

「こちら文科省警視治安課。遅人の屋外徘徊は原則禁止です。速やかに退却しなさい。」

「はい、分かりました。」

（ちえっ、見つかったよ）桎原みきは内心舌打ちした。

分裂以後新たに設けられた文科省の警察隊員だ。公序良俗と名打つてその実恐怖政治も甚だしい。夜だけでなく四六時中人の屋外活動を監視し、望ましくないと考える人に出くわせば勧告する。少しでも背くと罰金を課せられたり署に強制連行される。

「ちよつと君、福岡区NS8886番地に住んでる桎原みきさんで

すよね？」

丁寧な言葉の裏にちらつく挑発的な感情が非常に癪に障った。だが相手は私の心中を無視して続ける

「はいそうですが」

違いますと言ったところで向こうには所詮お見通しなのだが治安課への態度を確認する為にわざわざ質問してくる。

「これでもう5回目なんですけど、5回で連行補導があるので後ろの席に乗ってください」

言うや否や警察車両の後部座席から体格の良い男が二人出てきて、みきの量腕をがっしりと掴んだ。

「ちょっ、何すんですか！！」

思わず堪忍袋の尾が切れた。早朝の散歩を徘徊と言われ、しかも力づくで連行されるなど屈辱この上無い。おまけに抵抗しても無駄だと知っている。

「反抗的な態度あり」

助手席にいた男がすかさずメモを取る。紙とペンではなく博多技研製の電子タブレットだった。窓ガラスには黒い電子紗幕が降りていて、外の景色を確認出来ない。

「私は散歩をしていただけです！！」

「新人の分際で私たちに盾突くとはいい度胸だ。一体どんな魂胆が

そこに宿っている？」

凄みのある声に怯んでいる自分が情けなくて、腹立たしくて、でも言葉が遂に喉から出てこなかった。

「いいかお嬢ちゃん、君たち遅人は我々才人の科学技術と文化の発展の礎となる義務があるんだ。だから寸暇を惜しんで研究と勉強と労働に励み、その繁栄に助力しなさい。」

わたしに楽しむなと言っているのこの人は？何が科学技術と文化の発展よ、自分たちの都合を押し付けてるだけじゃない。そう思うも虚しく車は署に到着してしまった。助手席の男が先程のタブレットの文字を目で追っている。

「これは…。」

運転席にいた男に確認を仰ぐ。すると彼は血相を変えてこちらに近づいてきた。

「この思考内容はどういうことだ！！」

署の玄関からも誰かが来る。彼らに向かって男は怒鳴った。

「こいつを人格移植しろ！！」

一瞬何を言われたか分からなかったがその意味をようやく悟った時、恐怖で背筋が凍りついた。

「おまえの人格は東の属性があり有害と見なした。だが殺処分のも勿体ないので有効な資源に改良し、再びその身柄を解放する。」

署から出てきた男が恐ろしい程に淡々と説明してきた。まるで部品を検分するような冷酷で感情が隠らず無遠慮な眼差しだった。気づけば隣の男が注射針を手にしていた。私の意識は混沌としていった。もうここで本当の私は死んだと思った。やがて意識は闇の帳の中に完全に溶け込んだ。

暫くして目が覚めた。すると自分は知らない部屋で病院のベッドのような場所で寝ていた。もうどれくらい経っただろうか。部屋には時計もカレンダーもなく、手掛かりは窓の外の景色のみ。

「お目覚めですか？」

「はい。」

疲れていたので反発する元気も無かった。刹那、頭の奥に激痛が走る。この違和感の正体は何だ？と、昨日の男が口を開いた。

「処置として自己増殖脳神経と補助AIを移植しました。最初は違和感があるでしょうが暫くすれば慣れるでしょう。」

途端にまたプツンと切れた。ここまで人民が凌辱されるとは何が何でも許せない。しかし今度は明確に頭が痺れ、激しく傷んだ。

「あまり良からぬことを考えるとシステムが作動し苦しみますよ。」

そんな忠言なのか挑発なのか分からない言葉を無視して私はテーブルの小物入れにあったカッターナイフを徐に引たくり、自分の喉を刺そうとしたが無理だった。恐怖からではない。それ以上が動かないのだ。反射的にベランダへ駆け込み飛び降りを図るが、やはり手が動かなかった。

「死のうとすると行動が抑制されます。」

次の瞬間右手が勝手に動いて自分の顔を何回も何回も殴りつける。そこで気づいたが自分の手がやけに冷たい。

「勝手に死のうとした罰です。何度も死のうとすると両手の義手パーツが首を締めて確実に殺しにかかるのでやめましょう。」

これが私の手なのか…。こんな忌々しいもの付けやがって…。直後またあの痺れが襲う。

「お嬢さん、いい加減学習しましょう。」

すると男は胸ポケットから封筒を取り出した。

「これは戸籍謄本です。今日から貴女の名前は辻堂シミラです。私は辻堂マサヨシで今日から保護者になりました。」

っ！！！…どうということだ。この男が私の保護者など有り得ん。

「どうということですか？」

「貴女の家族は貴女を見捨てました。人格が変わった娘など要らないと…。」

嘘、絶対に嘘だ！！こんな分かりきった嘘がどうしてつけたものか！？

「何故そんな嘘をつくのですか？」

「嘘ではないです、証拠があります。こちらがその映像です。」

「映像なんていくらでも捏造出来るでしょう？」

「そう言われると思ひまして指紋印付きのお手紙を用意しました。」

渡された手紙はなんと見覚えの有る父の筆跡だった。その中にはしつかりとみきの名前があり、文中にはごめんなさい、人格の変わった貴女に辛くて会うことが出来ません。どうか私たちを忘れて平和に暮らしてください、とあった。違う、違うつてばお父さん。私の人格はまだここにあつて桎梏に操られてるだけなんだよ。しかもそんな無責任な理由で手放すなんて酷いよお父さん！！気がつくと目から涙がしたり落ちていた。テーブルの上に置かれた手紙の上に落ちてインクが滲む。こんなの嘘だ。本当であつてはならない。すると隣で抱き寄せる感触。マサヨシだった。

「お辛いですね。心中ご拝察します。」

「触らないでよ！！あんたなんか同情される謂われなんてこれっぽっちも無いのよ！！」

腸が煮えくり返ったが、また例の激痛に苛まれた。畜生、怒ることすら許されないのか。

「だからこんな辛い過去は忘れてしまひましょう。私が貴女をお守り差し上げます。」

すると男はライターを取り出し手紙を燃やした。

「…なんてことを。」

「辛い過去を事実と見なしますか？」

「そういう問題じゃ…」

「そんな可哀想なお嬢様に朗報が有ります。」

当てにするつもりは全く無いが藁にもすがる思いで振りかぶる。

「隣の部屋に貴女と同年の根岸稔という男の子がいます。」

こんな粗末な場所にまだ他に人がいたのか。けれどこんな状況下で
同年の男の子という言葉に少し興味を引かれている自分が場違い
で腹立たしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0033q/>

Minority Spirits ~ 失われたアイデア ~（前）

2012年1月5日11時46分発行